公益財団法人 花王 芸術・科学財団
http://www.kao-foundation.or.jp/

公開シンポジウム
「美しい生き方を考える」シリーズ
第２回

自然・人・文化のつながりの中で生きる

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公開シンポジウム

「美しい生き方を考える」シリーズ

第２回

2013年11月29日㈮　15：00 ～ 18：00

日本橋三井ホール

（東京都中央区日本橋室町2-2-1 COREDO 室町5F）

主催　公益財団法人　花王芸術・科学財団

自然・人・文化のつながりの中で生きる

目次

プロローグ（P2～P6）

「シンポジウムの意図するもの」

～つながりの大切さ～

東京大学名誉教授
花王芸術・科学財団評議員

原島　博

基調講演（P8～P16）

「つながりを活かす街づくり」

～建築からみた人と文化のつながり～

建築家・東京大学名誉教授

内藤　廣

ミニレクチャー（P18～P25）

「地域資源と“心産業”」

～過疎を自然と人のつながりで再生～

株式会社トビムシ取締役
小村力研究所所長

牧　大介

ミニレクチャー（P26～P32）

「風景と共存するくらし」

～写真を通じてみた自然と文化のつながり～

写真家　日本写真芸術学会評議員
花王芸術・科学財団評議員

織作　峰子

パネルトーク（P34～P42）

原島　博・内藤　廣・牧　大介・織作　峰子

プロローグ

「シンポジウムの意図するもの」
～つながりの大切さ～

東京大学名誉教授
花王芸術・科学財団評議員
原島 博

ヒトとチンパンジーはどこが違うか？

ご紹介いただきました原島です。今回のシンポジウムのイントロダクションとして、問題提起をさせていただきます。我々はヒト、ホモサピエンスですが、ヒトというのはつながりを求める動物です、その話から入らせていただきたいと思います。

ヒトとチンパンジーを比べたときに、どこが違うのでしょうか。たとえば、この２つの顔を見たときに、何が違うのでしょうか。DNA は、１％ぐらいしか違っていません。99％は共通です。僕は、その１％の違いが重要だと思っております。では、その１％の違いは、どこからどのようにして生まれたのでしょうか。

チンパンジーのほとんどは、動物園でなければ、アフリカの熱帯雨林で暮らしています。我々ヒトの祖先も、そこに暮らしていました。そこはすばらしい場所で、樹の上に手を伸ばせば、おいしい木の実がたっぷりあります。猛獣が襲ってくるかもしれませんが、樹の上に逃げれば安全です。そのような楽園で暮らしていました。

ところが我々の祖先は、よせばいいのに、森林から外へ出てしまったのです。もし、森林の中にそのままいれば、非常に幸せな生活をしていたかもしれないのに、外へ飛び出してしまいました。ちょうどその頃、アフリカ東側にプレートテクトニクスが沈み込む場所があって、そこが草原地帯になりました。その草原地帯、つまりサバンナに、直立歩行を始めたヒトは、飛び出してしまったのです。ところがそこは、とんでもなく過酷な環境でした。

どう過酷だったかといいますと、サバンナではライオンやヒョウなどの猛獣が襲ってきたときに逃げる場所がありません。すぐ近くに食べるものもありません。遠くまで取りに行かなければならない。でも、赤ちゃんがいる女性は、遠くまで行くことはできません。男性が代わりに取りにいかなければならない。そういうことになりました。では、こういう厳しい所で、なぜヒトは生き延びることができたのでしょうか。

ヒトは共同生活を武器とした

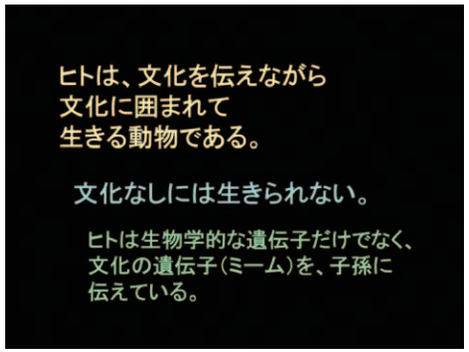
結論は、こういうことだろうと思います。ヒトは、共同生活をすることを武器としました。猛獣に襲われたとき、一人では対抗できないけれど、みんなで一緒に対抗すれば、なんとかやっていけます。要するに、敵に襲われないように、団結して、共同生活を営むことを武器としたということです。

さらに、食べるものを遠くへ取りに行く場合も、それぞれが自分で食べるものを一人で取りに行くのは、効率的ではありません。共同で取りにいって、取った食べ物を分配する。その方がはるかに効率的です。分配するというのは、動物の一部にはありますが、あまりないことです。ヒトは、分配するということを積極的に始めました。

ヒトは、自然の中で互いに助け合って生きる動物です。一人では生きられない動物です。我々は、一人になると寂しくなります。それは、もともとのヒトの遺伝子に書き込まれていることだろうと、僕は思っています。

さらにヒトは、道具と火の使用を覚えました。それは、ある程度、脳が大きくなったこともあるでしょう。直立歩行することによって、脳が大きくなっても安定に支えられるようになりました。また、共同生活をしていると、心の葛藤がいろいろとありますよね。その心の葛藤が、脳を大きくしたともいわれています。

脳が大きくなったヒトは、道具と火の使用を覚えて、生き延びるために、さまざまな創意工夫を始めました。しかも、自分が生き延びるためだけではなく、子孫につなげるということをしました。それが、文化となりました。



僕は、「ヒトは、文化に囲まれて生きる動物である」と言っています。我々は、先祖が創意工夫をして伝えてきた文化なしには、今を生きることはできません。我々は、先祖の恩恵にあずかって生きているのです。

文化の遺伝子は「ミーム」とも言われています。ヒトは、突然変異と自然淘汰だけではなく、ミームを子孫に伝えて、

文化を蓄積することによって進化しています。「人は自然の中で、互いに助け合って、文化を伝承しながら生きる動物である」。これが、チンパンジーとヒトとの１％の違いです。これが大きかったと、僕は思っています。

また、チンパンジーは、子どもを産めなくなると死んでいきます。老人の期間がほとんどありません。でもヒトは、子どもを産めなくなってからも長生きをします。それはなぜでしょうか。おばあさんについては、若い母親の育児を助けるためという有力な説があります。ヒトは１年で離乳をしますが、サルやチンパンジーは５年から７年、乳を与え続けます。ヒトは１年で離乳をして、年子を産めます。最初の赤子がまだ成長していないのに、次の子を産んでしまうのです。それは、おばあさんが育児を助けてくれるから可能になったという仮説を人類学者のホークスが出しています。「おばあさん仮説」として知られています。

サルやチンパンジーは、一人で赤ちゃんを育てます。ところがヒトは、一人ではなくて、おばあさんに助けてもらいながら育児をする。要するに、助け合うことにより、人類は生き延びてきて、おばあさんにも長生きする役割ができたのです。おじいさんの長生きについての有力な説は知りませんが、おそらく文化の伝承という意味で、おじいさんは非常に重要な役割を果たしているのだと思っています。おじいさんがいるから、孫に文化を伝え、文化が伝承される。おじいさんにもそのような役割があるから、長生きをしているのだろうと思います。

人は「つながり」の形を変えてしまった

これまで述べたように、「人は自然・人・文化のつながりの中で生きる動物」です。ところが近代になって、人は、「自然とのつながり、人とのつながり、文化とのつながり」の形をみずから変質させてしまったように見えます。

近代になって、人は自然よりも自分を上位に置くようになりました。自然の中にあって自分が生かされているのではなくて、自分がまずあって、自然はいわば、人のためにあるもの。そのように思うようになりました。

中世までは、自然は神が創り給いしものですから、与えられたもの、価値あるものとして、人はそこで生かされているという考え方だったと思います。ところが近代になって、自然は征服の対象になりました。自然の中に人が生かされているのではなくて、自然は人のためにあるもの。ということは、人のために自然を改造してもいいという考え方になってきたのです。

結果として、人は自然を自分たちが暮らしやすいように変えていきました。改造していきました。そして、人は自然の中ではなく、自然から隔離された人工的な都市空間に棲息するようになりました。特に産業革命以降、それが顕著になりました。都市への人口流入と集中が起こりました。

日本は、戦後になって、これが急に進展しました。工業化が都市集中を加速し、農村が過疎化しました。ブラックジョークで申し訳ないのですが、「そのうち、日本に過疎地はなくなるだろう」と言われています。過疎地に住まわれている高齢者の方がそのうちに亡くなると、もはや過疎地は過疎ではなくて、文字通り無人地帯になります。

さらに、都市に居住するようになった人は、管理された空間でしか生存できない存在となりました。これを自己家畜化という言い方をすることもあります。要するに、自然の中で生きることができなくなって、家畜のように管理された存在になったのです。

いまは金銭によるアウトソーシングの時代

その都市では、必ずしも互いに助け合わなくても、生活できるようになりました。コンビニへ行けば、お金さえ持っていれば、何でも手に入ります。自分で食物を生産する必要がありません。お金さえあれば、塾に子どもを行かせることにより、自分で子どもを教育しないでも、アウトソーシングができます。

互いに助け合うことも、行政に税金を払うという形で、金銭でアウトソーシングするようになりました。安全ですら、自分でやらずに、行政にアウトソーシングする時代です。

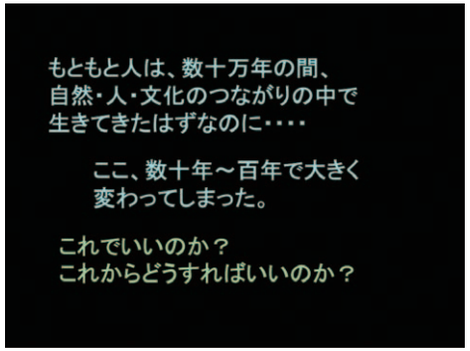
子育ても、おそらくはサバンナにいた頃から、人は家族あるいは隣近所がサポートしてきました。子育ては共同することが大前提だったのです。それが今、自分たちで助け合うのではなくて、「税金払っているのだから、保育所つくりなさい」と行政に依存することが多くなって、隣近所で助け合うことは、後回しになってしまっています。

文化についても、世代を超えた伝承がなくなりました。特に日本では、戦争を境になくなってしまったような気がします。戦争の前までは、おじいさんやおばあさんの言っていることは大事だとして尊重するという価値観があったと思います。ところが、戦争によって、老人たちは、自分たちに自信をなくしてしまいました。語らなくなりました。そして若い人たちは、老人たちが言うことを「古い」と言って、聞かなくなってしまいました。世代間の交流がなくなってしまったのです。

さらに言えば、かつては大家族で、おじいさんやおばあさんも一緒に住んでいましたが、今、それがほとんどなくなってしまいました、世代間の交流をする場や機会もなくなってしまったのです。

本当にこれでいいのか？

以上ここでは、「ヒトとチンパンジーはどこが違うか？」をヒントに、問題提起をさせていただきました。人は自然の中で共同生活をして互いに助け合い、そして文化の伝承をする、それがチンパンジーとの大きな違いです。人は、数十万年あるいは数百万年の間、自然・人・文化のつながりの中で生きてきました。しかし、それによって生き延びてきたはずなのに、わずかここ数十年、百年ぐらいの単位で、それを自ら変えてしまいました。これで本当にいいのでしょうか。これからどうすればいいのでしょうか。それを今日は、一緒に考えてみたいと思います。



このあと、内藤先生から「つながりを生かす街づくり～建築からみた人と文化のつながり～」というテーマで、基調講演をいただきます。続いて、パネルトークの前のミニレクチャーとして、牧先生からは「地域資源と“心産業”～過疎を自然と人のつながりで再生～」、織作先生からは「風景と共存する暮らし～写真を通じてみた自然と文化のつながり～」というテーマで、講演をお願いしてあります。短い時間ですが、おつきあいいただければと思っています。ありがとうございました。

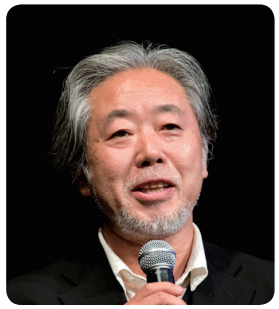
原島 博（東京大学名誉教授　花王芸術・科学財団評議員）

1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人の間のコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心を持ち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞（Gマーク）審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、あわせて女子美術大学（美術系）、明治大学（総合数理）、立命館大学（人文系）の客員教授でもある。公益財団法人花王芸術・科学財団　評議員。

基調講演

「つながりを活かす街づくり」
～建築からみた人と文化のつながり～

建築家・東京大学名誉教授
内藤 廣



我々は何を失いつつあるのか？

内藤です。よろしくお願いいたします。今日のテーマは「美しい生き方を考える」ということですが、みなさんは、「3.11 以降、美しい生き方なんて、できるの？」みたいな感じでいると思います。どうもすっきりしない。三陸の場合は、交通事故に遭ったような、外科的な感じがしています。福島は、臓物をやられたような、内科的な疾患という印象があります。どちらもすっきりしないですね。ですから「美しい生き方を考える」というのは、非常に重いテーマです。

建築なんて、ホントに役に立つのだろうかという状況に、ずっと置かれています。私は建築家ですが、街づくりもずいぶんやってきましたので、今日はそちらのほうに少し寄せて、私の状況認識をお話したいと思います。

私は、建築や街づくりというのは、人間学だと思っています。建築を頼む側のクライアントも人間だし、具体的に建物を造る職人さん、現場監督、いろいろな人たちが、すべて人間です。この人たちの気持ちがわからないと、建築も街づくりも、基本的にはできないということになります。

それから、3.11 以降、私は、「失われたもの」について考え続けています。たとえば陸前高田の何もない平地に立つと、失われた街というものを頭に思い浮かべます。おそらく、ここに住んでおられた方は、以前は自分の街について考えたことはなかったと思います。そういう方が、突然街を失ったときに、街というものについて考える。あるいは、被災地に行きますと、ほとんどの方がご家族を亡くされています。亡くされた途端に、家族というものを強烈に意識される。今日ここにいらっしゃっている方も、身内の方や親しい方が亡くなったときに、その方の全体像を、生きていらっしゃったときよりも強烈に、内側からイメージされるということがあると思います。それと同じことが、非常に大きなスケールで起こっているのです。

福島はどうでしょう。福島は、街はあるのに住んでいけないと言われています。故郷がすぐそこにそのままあるのに、自分の知っている街とはまったく違うものに変わってしまったときに、「街というのは、なんだろう」と、みんなが真剣に考えるわけです。失われたものが、ある種の共同性のようなものを呼び覚ますということもあるかもしれません。もしそうであれば、建築や街づくりを考えるときに、「我々は何を失いつつあるのか」ということを想像してみる必要があると思います。それは必ず「我々が何ものであるか」を考える上で役に立つはずです。

人にも街にも二面性がないとつまらない

ここで、わたしとは何か、ということから始めたいと思います。まず、考えてみます。これは、「二つの人格が私の中にいます」という図です。

左の青鬼は、現実的で、論理的で、整合性を求めて、倹約家で、まともで、堅気で、枠組みを大事にして、精神主義で、求道的。東京大学に勤めていたときは、できるだけこういう顔をしようと思っていたはずです。でも赤鬼の私は、夢想型で、頭の中は支離滅裂で、情熱もあるし、野放図で、やけくそで、場当たり的で、なにかというと逸脱を好み、快楽主義で、放蕩であると。人間というのは、内側にいろいろな面を持っています。皆さんもそうだと思います。

じつは、街や地域も同じです。都市計画をやりすぎると、街には「湿り気」がなくなります。乾いてくるんですね。でも、街には湿り気が必要です。湿り気とは何かというと、ちょっとした裏の部分です。銀座の建物はどんどん建て変わっていますが、じつは銀座の良さは、裏通りとも言える通り抜けの良さだったりします。京都の良さは、路地の良さだったりします。街にはそういう二面性がありますよね。

バルセロナという街があります。私、若い頃、スペインに２年ほど住んでいたのですが、オリンピックのときに大変な都市改造がありました。都市改造の前は、港へ抜けるメインストリートがあって、その左方に 50m ぐらい行くと、ゴシッククォーターという歴史的な街区があります。右方に 50m ぐらい行くと、そこはヨーロッパ一のバリオ・デ・チノスという売春街。これが港町の独特の空気をつくっていたわけです。表と裏です。ところが、オリンピックをやるので、そんな怪しげな所はけしからんということで、全部きれいにした

わけです。そうすると、街はつまらなくなるんですね。こういう二面性というか、表と裏みたいなものをちゃんとつくっておかなくてはいけないと思います。

つまり、自己同一性ということです。「私が私自身である」ということは、どうやって認識されるのか。自分をどうやって他人と切り分けるのか。そしてそれを、どうやって発見するのだろうか、ということです。それには、表と裏の両方を見なくてはなりません。

これを三陸の街の話につなげて考えてみます。復興ということになると、裏側は切り離すわけです。予算をつけなくてはいけないし、制度の中でやらなくてはいけない。そうすると、表だけの論理でやらざるを得ない。街自身がどうであるかということよりも、表側の論理で押し通すことになる。そうすると、どんどん乾いた計画になっていくわけです。「予算はできるだけ節約したほうがいい」「枠組みが大事」「法律には従ってください」ということになります。それをものすごい勢いでやっているのが、今の復興の姿です。

1960年型の自動車に乗って今を走る

「1960」という謎のスライドです。私がこの２年間、考えてきたことです。「みんながこんなに一生懸命やっているのに、なぜ復興が進まないのか」と。市役所の人もコンサルタントも中央官庁も必死でやっているのに、全然進まない。「こんなに一生懸命やっているのにうまくいかないのは、世の中の仕組みがおかしいんじゃないか」と思うようになりました。

それでほぼ１年間、法律の本ばかり読みました。たとえば、集団移転特別処置法という高台移転の法律で、権利関係でわからないことがあると、民法を読んでみる。民法を読んで根拠がわからないと、憲法を読んでみる。そうやって、国土交通六法と民法と憲法をほぼ１年行ったり来たりして、大体わかってきたのは、1960 年ぐらいに戻ってみないとわからないということであります。

戦後、憲法が作られて、その下にさまざまな法律が作られた。そして 1960 年あたりから、「さあ、これから高度成長だぞ」ということになった。1960 年末には、池田内閣が所得倍増計画を発表した。経済成長はここからですよね。そうすると、GDP ７％とか９％成長を前提に、社会的な供給をどうしていったらいいのかということで、日本工業規格（JIS 規格）や日本農林規格（JAS 規格）が整備され、建築基準法や都市計画法も高度成長に合わせて整備し直されることになりました。

ラインナップがそろうのが、1960 年前後。1960 年に世界デザイン会議が東京で開かれ、ルイス・カーン、ポール・ルドルフなどの世界的な建築家が集まりました。日本では黒川紀章さん、菊竹清訓さん、槇文彦さん、デザイナーでは田中一光さん、杉浦康平さん、永井一正さんとか、そういう人たちが一堂に会して、「これから日本をどうつくっていくんだ」みたいな話をしました。そこに集まった人のエネルギーと知恵が、日本の高度成長を支えたわけですね。

ところが、3.11 みたいなものが起こってしまうと、高度成長期につくり上げてきたものが、全部じゃましているんですね。行政的な手法も法律も考え方もそうです。なぜ復興が遅れているのかを大雑把に言うと、「僕らは 1960 年型の自動車に乗って、今を走っているようなものです」といえます。

そして、もう一度考えるアイテムとして、人口と自然と技術があり、この３点セットをめぐって、我々は半世紀やってきました。一次産業の問題であったり、年金の問題であったり、少子高齢化であったり、人口減少であったり。日本の社会システムと法制度と常識は、GDP が７％とか９％成長を前提に設計されていますから、当然のことながら年金は破綻します。一次産業も破綻ということになります。技術は、原発の話も含めて、情報革命、バイオ、ナノテク、スマート化というのが、これから社会を引っ張っていくことになると思います。

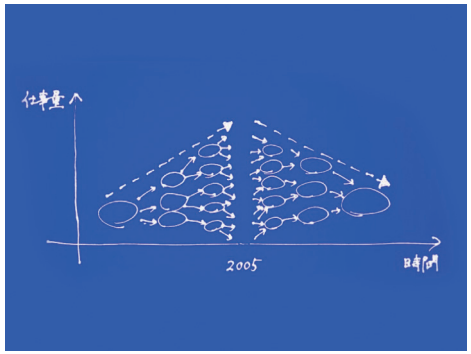
お見せしているのは世界人口の推移です。ともかくすごいですよね。疫学系の先生に聞いたときに、「最大で 90 億人ぐらいまでじゃないですかね。何かが止めます」と。「何が止めるんでしょうね」と聞いたら、「たぶんウイルスじゃないですかね」とおっしゃっていました。僕らが知らないウイルスが、僕らの人口増をどこかで止めるという話です。なぜこれを見せたかというと、このトレンド、右肩上がりなのです。

これは、日本の人口の推移です。1960 年はこのあたりです。このトレンドと世界人口のトレンドが一致していますよね。私たちの生活の中で使うもの、私たちが欲しいものを開発すると、それは国内で売れて、さらに世界でも売れるという構図です。要するに、日本の人口トレンドと世界の人口トレンドがシンクロしていたわけです。

ところが、2005 年から新たな世界が始まりました。人口が減ってくるわけですね。100 年ぐらいすると 6000 ～ 7000 万人ですから、明治維新のときの 1.5 倍ぐらいです。その人口で、この列島に暮らすことになるといわれています。これは、どうも人類未体験ゾーンらしいんですよ。このカーブは歴史上ないんです。ですから、2005 年以降、私たち日本社会は、人類の未体験ゾーンを生きているというふうに考えてもいいと思います。いろいろなことがうまくいかないはずです。

これは、今の図を僕なりに書いたものです。増加傾向の社会というのは、やることがどんどん増えてきます。今日よりも明日のほうが、今年よりも来年のほうが、やることが増えてきます。だから、分業化しましょうということになります。「家なんていちいち大工さんに頼んでおけないんだから、分業化の極地のようなプレハブでやりましょう、大量生産

でいきましょう」と、こうなるわけです。役所も、「やりきれないから、これは分けてやってくれ」と、こうなるわけです。ところが、この仕組みをいったんつくると、なかなか変えにくい。「人口が減ってきたので、少し統合的に、横串的に、ホリスティックに考えていけばいい」というふうにすぐにはならないんです。そうはならない仕組みを我々は持っています。

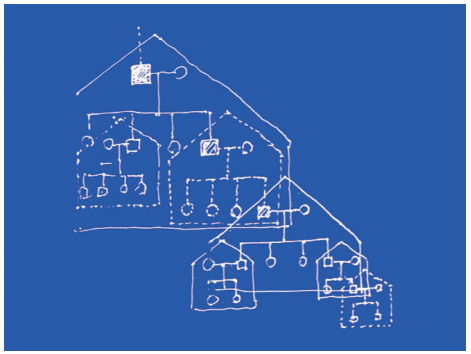


これは、つい最近、総務省が出した国勢調査の報告です。要約しますと、東京と名古屋を除いて、ほぼ日本全国、人口が減少するということです。中山間部は、強烈に減少する。これをどうしていくのか。減っていけばいいじゃないかとも思いますけれど、じつは山間地で棚田をやっていたとすると、あれは間接的に水の管理をやっているわけですね。離農した途端、棚田は崩れます。棚田が崩れてどうなるかというと、おそらく河川に土砂が流入します。そうすると、洪水も起きやすくなるし土石流のようなものも起きます。「そういうものに耐えられるんですか？」ということですね。国土全体が崩壊します。都市だけが生き延びるということは、人間でいうと、血が末端まで回らなくて、体はボロボロで、頭と心臓だけが元気みたいな、そういう感じになると思います。

人口が増えてこられたのは、経済の力が押し上げてきたからです。経済の力が弱くなると、人口は減ってきます。増加傾向の点線の先に見えているもの、いわばこれは坂の上の雲です。いずれはこうなるという坂の上の雲を見てやって来たんだけど、2005年を境に坂は下り坂になってしまった。坂の上の雲を見続けている限り、日本の将来はありません。過疎とか、無人化ということになってしまいます。せめてこのあたり、つまり極端なことが起きないようにする。それをどうつくれるかというのが、我々のやるべきことだと思います。三陸や福島のことも、基本的には同じです。あそこでは、わたしたちが近い将来抱えるはずの問題が、極端な形で現れているのです。

失われたイメージを求めて生きる

家族制度について書いた時に、頭の中で考えた模式図です。昔は、いわゆる大家族制度の中で、農業社会が保持されてきました。そのうちに囲いが孤立していき、「俺は次男坊だから、近くに家を造って住むさ」と独立する。やがて、都会に出て行く。そうやって大家族はどんどん核家族化していくわけです。この構図が何なのかを考える必要があります。



皆さんは、家族というものをお持ちだと思います。しかし家族というのは、法律用語にはなっていません。明治憲法にはありました。明治憲法には家父長制というのがあって、家長がいて、家長には財産処分権と婚姻許諾権という、明快な権力が与えられていました。

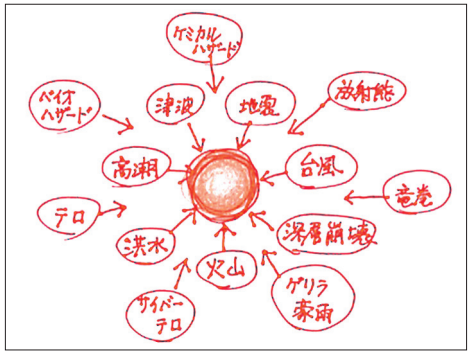
ところが、マッカーサーが来て、家族というものをなくしました。戦前まであった社会の基本構造を変えたかったからです。ですから、今、家族があると思っていますが、それは失われたものです。婚姻届を出しますから、夫婦はあります。出生届を出しますから、親子はあります。家族法はありますけれど、家族は規定していない。つまり、社会的な裏付けがなされていない虚像です。これが問題です。皆さん、プレハブ住宅を持って、いつかは家族で住みたいとか、思うわけですね。でもそれは、失われたイメージを求めているんだと思ったほうがいい。先ほどの失われた街と同じです。失われているからこそ、イメージとしてつくり上げようとしてきたと、いえなくもないのです。

山田洋次さんの映画の寅さんだって、そうですよね。「あんな人、昔いたけど、今いないよな」というところで、イメージが成り立つわけです。要するに、失われたものに対して、イメージをどう与えるかということで、映画が成り立っているんだと思います。そういう「失われた共同体」、吉本隆明的に言うと、「共同幻想」。それをどうイメージするかということになります。つながりというのは、そういう中で生まれるものだというふうにも思います。

大災害が起きた三陸のような場所で、いきなりそういうものが目の前に現れるわけです。ですから衝撃なわけですね。我々は、失われているものをなんとなく感じ取っていますけれど、はっきりとはわからない。言葉にもできない。だけど、大災害があると、はっきりとわかるんですね。

日本というのは、台風、地震、深層崩壊、津波、高潮、洪水が来たり、サイバーテロがあるかもしれないし、ゲリラ豪雨、竜巻、放射能。これからたぶん出てくるケミカルハザード、バイオハザード、こんなものに取り巻かれているわけです。つまり、必死でイメージしているものに対して、いくつもの揺さぶりがかかるわけです。宝永の大地震のあとに富士山

が爆発していますから、火山だってあるかもしれません。つまり我々は、漠然とした不安の中にいろいろなものを生み出そうとして、建築をつくったり、街をつくったりして、なんとか生きようとして、暮らしてきたのだと思います。



ひょっとしたら、家族が失われていくと、人は住宅を建てたくなるのかなとさえ思います。建築家として仕事をしていると、そう感じることもあります。本当に好き合っていたら、立派な家なんかなくたって成り立つけれど、「愛情が薄れてきたかな」と感じると、「家でも建てるか」となることもあると思います。地方自治体も、豊かな文化が遠のいていくと、「何かしなきゃ」と、コンサートホールや美術館をつくったりする、ということになるかもしれないという気もしています。

陸前高田の被災後の写真です。市役所前の市民会館では、じつにたくさんの方が亡くなりました。失われた街ですね。ところが、さらに恐ろしいことが起こっているのではないかと思います。津波は物理的に街を破壊して、いろいろなものを流し去りましたが、復興という第２の人災が襲っているような気がしてなりません。なんとかしようと思いますが、ほとんど連戦連敗の有様です。今、陸前高田には、なんにもない。

新しい市街地を作るので、盛土が始まっています。今泉地区は、標高が 120m ですが、それを 80m ヘッドカットをして、その土を市街地に持ってきて 8m 盛土するのです。つまり、記憶がまるでなくなるわけです。手がかりがなくなってしまうということがあります。

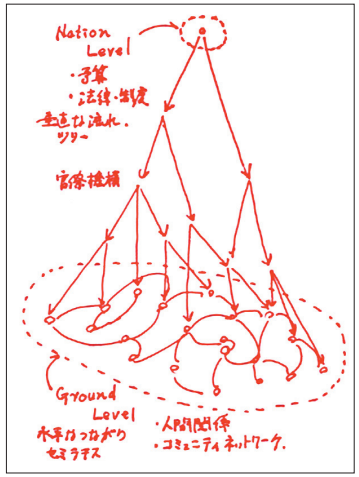
「失われたものが甦る」と言いますが、それには手がかりが必要です。山の形も川の形もなにもかも変わってしまったら、手がかりがなくなってしまうわけですね。そうすると、何かを思い出す術がない。そういう状態が、あちこちで起きつつあります。そういう中で、人と人とがつながり合えるような場所が作れるんだろうか。というのが、私の疑問であります。

これまでの50年を見直し、考える

被災前の野田村の写真です。被災規模はさほど大きくはありませんでしたが、それでも 37 名の方が亡くなって、流出家屋が 300 世帯ぐらいでした。ちなみに陸前高田は、1700 名強の方が亡くなって、流出家屋が 3100 軒ぐらいです。

ほとんど平らになった野田村です。なぜこれをお見せするかというと、自治体が、「私たちの街は、こういう街になりたい」と、強烈にイメージをして、住民の方も「こうなりたい」と思えるかどうかというのが、すごく大事な時期に来ていると思うからです。

イメージできるということは、考えるということです。考えなければ、国の補助制度と法律と、つまり 1960 年型の自動車ですべてができ上がってしまうわけですね。そして気づいたときには、誰も住まない平地と、超高齢化した高台団地、つまり 10 年後にはみんなが 80 歳を超えるような団地ができたりするわけです。やはり、強烈に「自分たちは、どういうふうに生きていくのか」ということを考えないとダメだと僕は思っています。



これは、役所の制度のポンチ絵です。法律が分業化していく感じですね。それに対して、フィールドには人間関係がいろいろつながっているわけです。隣のおばちゃんがいたり、町内会長さんがいたり、あの人とあの人は親戚だったり。フィールドには、根っこのような、フラットなコミュニティがあります。しかし復興になると、そこに落下傘のように、法律とか予算とかが、降りてくるわけです。これが強烈でありすぎると、コミュニティ、ネットワーク、人間関係といった水平的なつながりが、壊れてしまいます。ここの塩梅ですね。僕は、可能であれば上から降りてくる度合いが少なければ少ないほどいいと思っています。

1960 年の頃は、戦後の焼け野原で、役所はそんなに強くないし、人と人とのつながりのほうが、強かったのではないでしょうか。我々はここから始めているのだと思います。ここにいろいろな法律の制度を当てはめて、組み上げて、60 年代型の乗り物に乗って、これまでやってきました。

今、地域の地続きのネットワークがものすごく弱くなっています。高齢化して、過疎化して、脆弱になってきている。一次産業も、僕の専門である建設産業も、極めて脆弱になってきています。管理する人はいるけれども、つくる人がいない。大きな会社はたくさんあるけれど、お金の計算とネゴシエーションばかりやって、実際につくる人はすごく減っているわけです。つまり、モノづくりのネットワークとコミュニティの力が非常に薄くなっている。

東京大空襲の浅草あたりの写真です。ここから 60 年余りやってきたわけです。この 60

年間にやってきたものを、もう一度見直さなければいけません。60年間に何を失ってきたかということを、もう一度考えてみなければいけません。我々は、何を失ってきたんでしょう。そのことに、ちゃんとした答と形を与えて、ちゃんと未来につなげないと、我々がこれから生きていくのは、なかなか難しいのではないかと思っています。これが今日の投げかけです。

1960年。私は10歳で、戦後の匂いがずいぶん残っていました。バラックもあって、傷痍軍人が街頭に立って物乞いをしていたという記憶もあります。そこからずっとやってきたことをもう一度、見直しましょう。そこに、人と人とのつながり、これまでのこと、今うまくいっていないことの全部が集約されているような気がします。これで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

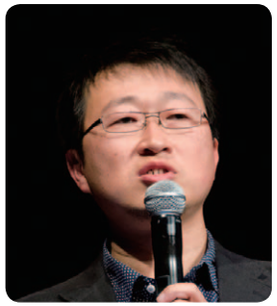
内藤 廣（建築家・東京大学名誉教授）

1950年生まれ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001～2011年東京大学大学院にて、教授・副学長を歴任。2011年～同大学名誉教授・総長室顧問。2007～2009年度には、グッドデザイン賞審査委員長を務める。主な建築作品に、海の博物館（1992）、安曇野ちひろ美術館（1997）、牧野富太郎記念館（1999）、倫理研究所富士高原研修所（2001）、島根県芸術文化センター（2005）、日向市駅（2008）、高知駅（2009）、虎屋京都店（2009）、旭川駅（2011）、九州大学椎木講堂（2014）など。また近著には、『内藤廣と若者たち　人生をめぐる一八の対話』（東京大学景観研究室編、鹿島出版会）、『内藤廣の頭と手』（彰国社）、『内藤廣＋石元泰博　空間との対話』（ADP）、『形態デザイン講義』（王国社）、『内藤廣の建築　1992-2004 素形から素景へ１』、『内藤廣の建築　2005-2013　素形から素景へ２』（TOTO出版）などがある。

ミニレクチャー

「地域資源と“心産業”」
～過疎を自然と人のつながりで再生～

株式会社トビムシ取締役
小村力研究所所長
牧 大介



「西粟倉・森の学校」の取り組み

ただいまご紹介いただきました牧と申します。よろしくお願いいたします。岡山県の西粟倉村という所で、役場と共同出資で、「西粟倉・森の学校」という会社を立ち上げております。今日は、この取り組みをご紹介させていただきたいと思っております。西粟倉村は、おそらく日本一やけくそなチャレンジをたくさんしている村で、若い人たちががんばっています。

過疎化が進む地域の中に、かつては当たり前のように存在した助け合いのコミュニティが、なくなってきています。地域の中だけで閉じたコミュニティではなく、都市にいる方々と一緒に地域の過去と未来を共有するような、新しいコミュニティのあり方、人のつながりを模索していこう、新しい地域経済の有り様を考えていこうとしているのが、西粟倉村です。

西粟倉村の人口は、現在1550人ぐらいです。厚労省の推計では、2040年には、1000人ぐらいになります。多くの中山間地域では、3分の1ぐらいの人口が減るというふうに予測されています。2050年、2060年になると、もっと加速すると思います。でも、西粟倉村は、現状維持か、若干減るか、もしかしたら増えるかもしれません。地域の可能性をうまく掘り起こしていける地域とそうではない地域に、大きく二極化していくのではないかと、見ております。

西粟倉村は、2007年に雇用対策協議会というものを立ち上げました。この組織は村の人事部です。地域の戦力になる人材確保を全力でやっていこうということを、仕組みにしていく作業を行ってきました。

結果として、今、50名ぐらいの移住者がいます。のべ80名ぐらいが村に移住して、30名ぐらいはいろいろな事情から村から出て行って、50名が残っています。基本的に、起業家型の人材です。地域に仕事がないので、仕事を生み出し得る人材を重視しなければなりません。

新しい事業が、地域の中で次々と立ち上がってきています。組織内の新しい企業とか事業も含めて、家族経営的なものも含めると、10社ぐらいが立ち上がってきたかなというところです。新しく立ち上がった事業の売上げを足すと、大体5億円ぐらい。今年から来年にかけて、また伸びるのではないかと思います。70名ぐらいの雇用が、新しく生まれています。

西粟倉村 百年の森林構想

村の人事部が人材募集をしていくときに、「一緒に2058年を目指しませんか」と。写真は、村に移り住んで活躍している人たちと、元々村民で新しい事業を起こしている人たちのごく一部です。このほかに、まだまだたくさん、いろいろな人がいます。「百年の森構想」という大きな旗を掲げて、そのもとに集う仲間を募集していく活動をしています。

具体的に、森や木をテーマにした山村が、今どんなことをやっているのかを紹介します。これは、東京の代官山にできたオフィスですが、ほとんど西粟倉村の木を使っています。材料としての仕上げ加工をする機能がまったくないところから工場をつくり、工場の立ち上げに合わせて商品開発をしながら、オフィスや賃貸物件に設置するだけで床が作れるような、床ユニットの開発に、最初に着手しました。

最近も、200平米ぐらいのオフィスが新しく完成しました。このオフィスの施主になった会社が、「ホタルの森とつながるオフィス」と、言ってくださいました。関わったデザイナーさんや設計関係の人たちも、西粟倉村の森のことを、「ホタルの森」と言ってくださっています。「西粟倉村の森とつながっている」オフィスをつくって、そこで快適に社員の人たちに仕事をしていただくような。そんなオフィスづくりが、東京を中心に増えています。

日本は自然が豊かで、樹種も多様で、地形も複雑です。その日本の林業が、大量生産大量

消費のグローバル経済の中で勝負するのは、なかなか難しいのではないでしょうか。でも、グローバル経済に巻き込まれて疲弊してきたのが、日本の田舎であるとすると、方向転換をして巻き込まれないようにする代替案を持たなければならないと思います。

その代替案は「ちりも積もれば山となる」戦略です。小さなビジネス、小さな会社を、地域の中でたくさん起こしていこうとしています。量はなくても、可能性を取り出していけるような地域資源にしっかり向き合って、小さな事業を少しずつ、たくさん生み出していく。そしたら大きな会社と競合しないニッチな市場を開拓して積み上げて地域の経済を再構築していけます。小さな村の中でも、100社ぐらいは新しいベンチャーを生み出していきたいと思っています。

地域に資源はたくさんあるわけなんですが、チャレンジする人が足りません。たくさんのチャレンジが生まれて成長していくためには、地域の中または外から応援してくださる方々との心のつながりが重要です。西粟倉村の将来を一緒に考えてくださる、西粟倉村ファンの方々が、今たくさんいます。その方々に支えられながら、一般的には難しいと思われそうな挑戦をどんどん重ねています。新しいチャレンジを一つでも形にして、実績にしていくと、また応援団が増えるというような好循環が、だんだん高まってきています。

今の日本の経済も世界の経済も、このままもつとは思えません。地域の自然そのものの質、資産としての価値も含めて、ほったらかし、荒れ放題の所を十分に回復させて価値の高いものにしていくことと、心のつながりの豊かさを高めていくという、この2点をこれから10年かけて徹底的にやろうと思っています。そうすれば地域経済の自立性が高まり、世界経済がどうなってもやっていけるような基礎を築き上げることができるでしょう。

西粟倉村は、2004年の平成の大合併に入らずに、単独でいくということからスタートしています。そのときに、なぜ合併しなかったのか。過疎高齢化がこのまま進んでいくとすると、人口が減れば、役場の歳入は減ります。国からの地方交付税というのは、人口の影響を大きく受けます。役場の若手職員の多くは、じつは合併したほうがいいと思っていました。というのは、一番過疎化が進むと思われている地域の役場ほど、財政基盤が非常に弱くなっていくと予測されていたからです。

それでもこの地域が、人が生き続けていく場所であるためには、なんとか合併せずに、単独で残る道を我々は進むべきだという声が勝りました。その中で、「心産業」という考えが生まれました。大量生産、大量消費に巻き込まれない、人の心の豊かさに立脚していけるような、身の丈に合った経済を一からつくっていく。そういう気持ちでがんばろうという考えが生まれてきたのです。

国里哲也さんという人が、「木薫」という最初のベンチャーを立ち上げました。保育園、幼稚園の家具や遊具を専門にやる会社なんですが、今、社員15人の会社に成長しています。一人の挑戦者がいた、チャレンジがあったということが、村を大きく変えていくことになりました。第2、第3の国里哲也を増やしていこうと考えて、雇用対策協議会を立ち上げました。空き家の確保ですとか、包括的に人を育てていくことをやり、私もそこのお手伝いをさせていただきました。

雇用対策協議会が中心となり、役場と調整しながら、「百年の森林構想」という旗を掲げました。2008年、リーマンショックの頃です。2058年まで、あと50年かけて村を作り直そうと。ただ作り直すのではなく、過去に苦労を重ねてこられた方々の想いをしっかりと未来に受け継いでいこうということになりました。森を中心に置いたので、長い時間で考えるしかなかったという部分もあります。

1960年ぐらいに、村では一生懸命、植林をしました。がんばって植えすぎて、自然を壊してしまったのではないかという側面もありますが、当時は、子のため、孫のため、次世代のためにという思いで、必死に木を植えてがんばってこられた方々がいます。せっかく植えてここまできたものを、ここで諦めずに、あと50年がんばれば、こんな森になります。

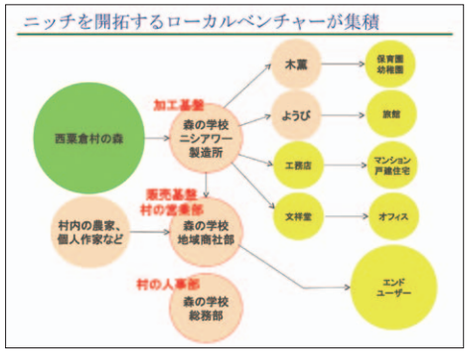
西粟倉村に1カ所だけですけれど、100年を超えている、杉の美しい人工林があります。これを一つのモデルとして、こんな風景に囲まれた村を50年かけてつくり直そうということで、100年の森構想という旗を掲げました。

下草がしっかり生えて、水分も十分保たれた環境になると、7月下旬ぐらいにヒメホタルというホタルがたくさん飛んでくれます。50年後に、このヒメホタルがたくさん飛び交う風景を実現したいということが、一つの目標です。ヒメホタルが、シンボルとして扱われています。

このような取り組みを、村の中の閉じた関係の中だけではなく、村民以外の方々にも所有者になっていただくような感覚で投資をしていただく仕組みをつくりました。小口出資の仕組みを立ち上げて、調達したお金で森林組合が使う機械を購入しました。そして、小さな村役場に地権者調整を専門にする職員を置きました。これから10年間は、山の経営が赤字でも、投資を続けるというような前提で、取り組みを進めています。

ローカルベンチャーをたくさん立ち上げる

森の学校という会社には、3つの機能があります。真ん中の赤い丸で囲んでいるところが、森の学校が持っている機能で、一番下からつくっていきました。管理系の組織が、村全体の人事と育成も担い、森の学校の内部に限らず、移住者のお世話係をしています。



人事部の次に立ち上げたのは営業部です。ニシアワーというウェブサイトを立ち上げて、外部とのコミュニケーションをしていく村の営業組織を立ち上げた。その次に工場ですね。建築の現場で使っていただける木を材料として仕上げていくための工場を、ゼロから立ち上げました。工場に関しては、3年かかってようやく黒字化しました。

会社全体としては、大体4年で黒字になってきています。木材に関しての知識、経験のあったスタッフは、ほぼゼロです。森の学校が、都市部の工務店さんと直接連携して家づくりをするとか、オフィス専門の会社と連携するとかありますが、主に「木の里工房　木薫」「木工房ようび」の2社が、保育園や旅館の内装など、得意な分野を持ちながら、木を使う空間をどんどん広げています。

こうした形で、西粟倉村の森から出てきた木が、これまでは大きな流通の中に巻き込まれて、どこにどう行くのかわからなかったところから、顔の見える関係の中で流通させていけるシステムを、数年の間に確立してきました。これから小さなニッチに対応していくベンチャーを、木材の分野でたくさん立ち上げていきます。おもちゃを専門にする会社があってもいいと思います。いろいろな分野での仕事がまだまだあると思うんです。

ニシアワーというウェブサイトは、個人向けの物販とか情報発信の中心になっているサイトですが、西粟倉村という場所で流れている時間をお客様と共有していきます。木材以外の商品の販売も行っています。

四季がぐるぐるめぐっていく中で、その中心に西粟倉村の人の暮らしがあります。川があって、田畑があって、家があり、外側に里山、奥山という空間が広がっています。外側からぐるぐる回りながら、内側に入っていくような、地域の生態系の中で、そこにあるものをフルに活用しながら、人々が暮らしていけるような、そういった暮らし方を実現できるような、地域資源に立脚した価値創出を行うベンチャーをたくさん立ち上げていこうと思っています。

そして、それをお客さんに買っていただくわけですが、離れて暮らしているお客さんにも、そういった暮らしを提供していくことをめざしていこうという、そういう考え方です。

1本の木を切るところから、山主さんの話も聞いて、木が育ってきた歴史、山主さんの家の歴史も聞きながら、お客さまに半年がかりで学習机を作っていただいて、4月の入学に間に合わせていくというような、そういった企画も毎年続けてきています。

まったく木材の知識もなかった、やる気だけはありそうな、当時26歳の井上くんという人に、家を2棟建てるということの責任、いわゆる現場監督さんの仕事の修業をさせました。勉強をさせて、彼を中心に、工場も立ち上げて。彼の知識や経験で足りないところを補う外部のネットワークは、私のほうで手配しました。4年経つと、こんなに立派な顔になりました。

2泊3日で西粟倉村の田舎を体験する研修に、県庁の林業職員だという人が来てくれました。「現場に近い所で林業の再生をやりたい」という、まっすぐな強い思いを持った人でしたので、県庁をやめるようにみんなで説得しました。なんとかやめてくれて、結婚もして、12月には子どもが生まれます。

坂田くんは、最も典型的なパターンです。ビジターで来て、リピーター、サポーター、お金を出資してくれる森づくりの応援団になって、最後には人生を投資して、村のメンバーになったという。ファンができてくると、商品や村が好きな人が移住者にもなっていくという流れがあります。

4年前に来た大島くんという人が、4年経ったときに、奥さんもいて、子どもも生まれて、6人の会社になりました。

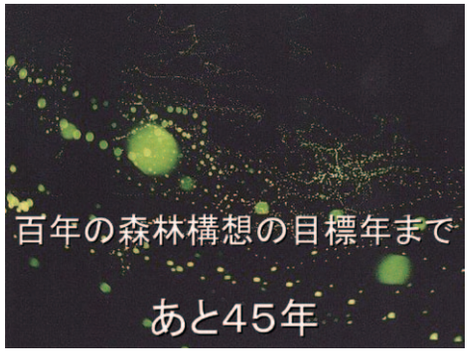
西原さんは、森の学校の社員を卒業して、今、ご飯屋さんをやっています。彼女はジビエ料理専門です。鹿の解体、獣の解体が大好きなんです。

道前さんは、日本酒が好きなんです。この人がやっているのは、出張日本酒バーといいまして、代行タクシーすらない村に、移動式の居酒屋をつくって、集落を移動していくということです。これが大賑わい。4月には酒屋をオープンさせますし、西粟倉村の酒米を使った西粟倉ブランドの日本酒のプロデュースにも挑戦しています。

村の人事部長をやってきた大橋さんという人が、障害者雇用のNPOを新しく立ち上げます。村で失業する男性が少なくなったので、あとは、障害者、女性、高齢者です。こうした人たちの可能性を引き出していくための仕組みをしっかり整えていこうということで、村の人事部長の新たな一歩となりました。彼は今60歳。5年で軌道に乗せて、引き継ぎをして、10年でやめると言っています。

西粟倉村は、こんなやけくそな人たちが、いろいろなチャレンジを始めている村です。これを50年間続けながら、流れを増幅させながら行けば、将来、非常にいい森がたくさんできるわけです。50年後にはもうおられない人たちの思いをどれだけしっかり引き継いだまま、50年後を迎えていけるかどうか。そのときには、美しい森が広がって、ホタルがたくさん飛ぶのではないかと、夢みています。

私自身は立ち上げ屋ですので、あと数年でこの村からは離れますが、2058年7月にはぜひ村に行って、大同窓会ができればと思っています。森に関わって一生懸命やられて、50年後には亡くなられた方は、ヒメホタルになって出てきていただくというふうに、お願いをしているところです。50年という時間を前提に置くと、意外と力が出るところがあります。ご清聴ありがとうございました。



牧 大介（株式会社トビムシ取締役・小村力研究所所長）

1974年、京都府生まれ。京都大学大学院（森林生態学研究室）修了後、三和総合研究所（現在 三菱東京UFJリサーチ＆コンサルティング）を経て2005年アミタ持続能経済研究所を設立し、所長に就任。主に農山漁村における新規事業の企画・プロデュースを手掛ける。2009年に株式会社トビムシを設立し、取締役に就任。同年、西粟倉村役場と株式会社トビムシの共同出資により株式会社西粟倉・森の学校を設立し、代表取締役に就任。2013年に株式会社トビムシの事業部として小村力研究所を設立して所長に就任し、各地で地域資源を活かすローカルベンチャーの育成に注力している。

ミニレクチャー

「風景と共存する暮らし」
～写真を通じてみた自然と文化のつながり～

写真家　日本写真芸術学会評議員
花王芸術・科学財団評議員
織作 峰子

自然によって人が生かされている

こんにちは、織作峰子です。今回のテーマに、私が疲れたときに訪れているスイスという国が、一番似合うのではないかなと思いまして。写真をご覧いただきながら、ご説明をしたいと思います。これは、ヨーロッパ最大のアレッチ氷河の入口です。スイスの人というのは、トレッキング、ハイキングが大好きです。

レッチェン谷

手前に大きな木があります。スイスを旅していると、雑木林のような森がいっぱいあります。それは、一見植えっぱなしのように見えて、じつは非常に手をかけて、雑木林につくっているということなのです。きれいに整理整頓された林が決して美しいものではないということを、スイス人はよく話しています。

大きな窓から外の風景が見えています。風景を、絵画が飾ってあるような雰囲気で見せているというのは、自分たちが身近に見ている風景が、一つの絵といいますか、そういう印象を持つものであると意識しているのです。非常に大きなガラス窓を使って、風景を部屋の中に取り込んでいる。こういう建築デザインも、とても多いと思うのです。

グアルダ

また、日曜日に子どもが自分の家でつくった食べ物を売っていました。お母さんは、その卵でつくったケーキを売っています。子どもたちに、人との接し方のなかでどうやってものを売るかということと、自分の家で産んだ卵の大事さ、命の大切さを、楽しみながら理解させています。それを、隣でお母さんがにこやかな表情で笑って見ているという状況をよく見かけます。

続いて、スイスのアルプスのアルプ。山のほうへ行きますと、木材でできた家がかなり増えてきます。外に向けてのディスプレイですね。昔、日本の家屋に出窓が付始めてきたときに、飾り物が家の中の人に向かって置かれていたのです。しかし、欧米では外を歩く人が楽しめるような演出をしているということで。街を歩く人のために植物が外向きに植えられているのが普通です。イタリア語圏に入り石の文化から、建物が石造りに変わってきます。アルプスだと木、ドイツ語エリアは漆喰が多いです。それぞれの地域でとれる産物を生かした建物のつくり方、そしてその中での暮らし方、住まい方というものを、楽しみながらうまく工夫していらっしゃるなと感じます。

グリヨン

グリヨンという街で見かけたお祭りです。動物と子どもたちが一緒に暮らしています。お祭りになると、まるで自分のペットのような感じで山羊を引き連れて歩いている。こういう情景が見られます。

馬と一緒に写っている女の子。小さいときに、「あなたにあげるわよ」ということで、親御さんから馬をプレゼントされたそうなんです。彼女は、餌の用意から糞の始末までをしています。この馬は、自分の子どもなのか、妹なのか、弟なのか、わかりませんが、身内として動物を大事にするという気持ちが生まれるわけです。ただかわいがるペットではなく、「生かさないといけない」「餌を食べさせなくちゃいけない」「糞の始末もしなくちゃいけない」。それを全部、彼女がやっていました。私はその姿をずっと見て「素敵な人生の始まりを小さいときから送っているな」と感動しました。

ヴァルスは、ヴァルスウォーターという大量のミネラルウォーターが出る地として有名。

アンティークバスを走らせています。このきれいに咲いている花は、翌日行ったら刈り取られて何にもなくなっていました。お天気がいいと、全部刈り取るそうです。観光客のための畑ではなく、自分たちが生活するための畑なのです。一日違うと風景が大きく変わるというところも、一つの楽しみでもあります。

お父さんが男の子を肩車して、牛の世話をしていました。こういう光景って、今の日本ではあまりないような気がします。自然によって人が生かされ、子どもたちは「いずれは馬の世話を自分がするんだ」というふうに、自然に意識をしているという。非常にナチュラルですけれども、これから生きていく指針のようなものを親が自然と教えているのではないだろうかと感じました。

モントルー。ナルシスという、有名なスイセンの原種です。ベルエポック時代からずっと、毎年春になると咲きます。遠くから見ると、真っ白な雪山のように見えるのです。こういう自然の姿というのも、まったく手を入れてないように見えて、じつはしっかりと管理をしています。それでいて自然に見せるという努力がされています。一日だけ入ってもいい日があって、たまたまその日に行きましたら、オシャレな女の子が遊んでいました。

ブラウゼー

アルプスの雪解け水というのは、このように少しグリーン色がかっています。少し小休止をしていましたら、家族が向こうのほうから、船でやって来ました。スイスの人たちは、子ども時代から家族の絆というものを自然に身につけているんだなというふうに感じました。

こちらは、ちょっと大きな雪解け水。氷河水からできている湖です。あまりの美しさに、カメラを構えながら前進していましたら、行き止まりなのを知らず、湖に落ちてしまいました。落ちた拍子に怪我をしまして。予定も変更して、1時間ぐらいじっと休んでいました。この湖から脱出して帰ろうとしたときに、日が暮れて、右の端の森だけがかすかに夕日で染まったのです。そこに、ボートの二人がやってきました。これは、湖に落ちていなければ撮れなかった1カットです。

エッシネン湖 / カンデルシュテーク

セドルン近郊

車窓から二つの椅子を見つけました。はるか向こうを見ていただくと、かなりの高地だということがわかると思います。電車が止まる駅もないので下から登るしかないのですが、トレッキングが好きなスイス人のために、ベストビューポイントに必ずベンチが置いてあるんです。ベンチが置いてある所は、ビューポイントなのです。非常にわかりやすいです。

ブレガリア谷／ソーリオという町でセガンティーニという画家が住んでいました。この風景はセガンティーニが生きた時代とまったく変わっていないのです。そのまんま、絵のまんまの風景が見れたことに、感動いたしました。

グリメンツ。ここもやはり、アルプスの山のほうなので、シャーレーといわれる木材で、家がつくられています。よく見ていただくと、ここに畑仕事をしている人がいます。このあたりは、自分でつくって自分で食べてというふうに自給自足なんです。そして、木のおうちに住んで。自然をうまく生かした生き方をしているのです。

グリメンツ

自然を守り、自然から学ぶ

写真の左に見えます建物、じつは五つ星のホテルなんです。五つ星ホテルといいますと、非常に高級なイメージがありませんか？　ここは、外見は200年前のそのままです。しかし、お風呂やアメニティは、最新型のものを使っていました。お料理がとてもおいしい、非常に美しいホテルでした。

次に、ギースバッハの五つ星ホテルの話です。ここは裏山一体が、ホテルの敷地で、裏山に大きな滝があります。ここに泊まった方は、必ず滝の裏から自分が泊まっているホテルを見ていただくというふうなつくりになっています。このホテルに行くには、向こうに見える湖を船で渡らないといけないのです。時間の流れをとても大事にして、自然の美しさを堪能していただく。それらすべてがホテルのおもてなしだという考えのようです。

シュタイン・アム・ラインは、北側ドイツ語エリアにあります。漆喰の街並みで、壁には美しい模様が描かれています。

スコットランド

スイスが終わりまして、次の写真はスコットランドです。タータンチェックのデザイナーさんの取材に行きました。彼らは洋服はもちろん、食器や衣類などをタータンチェックの柄にデザインするというデザイナーです。この家族は、毎週日曜日になると、家から車で1時間ぐらい離れた所にあるボロボロに崩れたお城へ出かけます。そのお城の散らばった石を1個ずつ拾って修復するというのが、二人の夢だそうです。はるか何キロ先まで飛び散っている石を拾ってきて、形を合わせて、いずれお城を復元するんだというのが、二人の夢。長い時間がかかる壮大な夢ですが、「叶ったときには招待をしてあげますよ」と言われています。まだ招待が来ていないので、復元されていないのでしょう。

マテーラ／イタリア

マテーラの洞窟遺蹟。ここは、10年以上前に私が行った頃は、住宅が許可されていない場所でした。この写真は昨年行ったときのものですが、世界遺産になって以降、お店もでき、かなりの人が住居として使っていました。今は一つの巨大な街ができてしまった感じですね。

この写真は、世界遺産になっているシャークベイという所にあるストラマトライトです。35億年前から棲息する世界最古の生き物で、バクテリアです。このバクテリアが生まれたことによって、酸素を発し、それを吸って、我々が生きていくことができているわけなのです。このエリアに行くと、本当に美しい空気が充満しております。これは、水の中から撮ったものです。

シェルビーチ / シャークベイ / オーストラリア

その近くにはシェルビーチがあり、海岸全部が貝殻なのです。貝殻ビーチで、海の中も貝殻なのです。シェルビーチは、観光地化されていますが、じつは皆さんが行っている観光地化されているシェルビーチは、別の場所のシェルビーチなのです。

ここは誰も人がいません。入ってはいけないエリアなのです。さっきのストロマトライトが棲息しているエリアも、入ってはいけない所です。私は特別な許可をもらって連れていっていただいたのですが、一瞬迷い道のような雑木林の中に入れられたのです。非常に不安で、どこに連れていかれるんだろうと。歩くこと20分。パッと出たらこの風景が、目前に広がったのです。観光客は一切入れません。でもそうして、自然を守っているんですね。

今回のテーマ「美しい生き方を考える」ということですが。自然を大事にすること、人と人との関わりを大事にすること、文化を守ることによって、きっと美しい地球が守られ、いずれ、美しく生きていくこともでき、美しい生き方を自然の中から学べるのではないかということを感じました。

日々進歩していくことは喜ばしいことですが、その中でも、ただ時代を追いかけるだけではなく、ちゃんとした認識を持ちながら、生きていかなくてはいけないと思います。こうして残された自然や風景というものを守るために、シャッターを切ったという意識も持っております。本日はご清聴ありがとうございました。

織作 峰子（写真家　日本写真芸術学会評議員　花王芸術・科学財団評議員）

1982年京都文教短期大学初等教育学科卒業。同年ミス・ユニバース日本代表に選出。1982年大竹省二写真スタジオ入門。1987年独立、フリーランス。2000年ウォーターフォードウエッジウッドライフスタイルアウォード受賞。2007年パリにて写真展「DIMENSIONS」「SAKURA」。2009年金沢21世紀美術館「DIMENSIONS」。日本ハンガリー（国交樹立）140周年記念特別招待作家としてブタペストMAI MANO HOUSE写真博物館にて「時」を開催。その他日本全国や世界各地で写真展を開催。「万葉のこころ」世界で感じる万葉のこころ。海外での写真作品と、万葉集の歌を重ね合わせ、日本人の根底にある心理と映像を照らし合わせる。「桜」桜の木に宿る、女性性の表現。「ディメンションズ」多次元を花の形を借りて表現。

パネルトーク

コーディネイター
原島 博
パネリスト
内藤 廣・牧 大介・織作 峰子

原島　これからパネルトークに入っていきたいと思います。休み時間にいくつかご質問をいただいております。その中に一つ、難しい質問がありまして。「原島さん、内藤さん、牧さん、織作さんにとっての『自然・人・文化のつながりの中で生きる』とは、どういうことでしょうか？」。この質問には、一番最後に答えることにしましょう。考えておいていただければと思います。

これからの進め方ですが、質問は、休み時間に出していただいたので、その直前の内藤さんに対する質問が多くなっています。ここではそれはあとに回して、まずは内藤さんから、牧さん、織作さんへの質問あるいはお話をうかがっての感想があれば、お聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

内藤　お二人のプレゼンテーション、絶妙の取り合わせでしたね。さっき、顔半分半分を分けて描きましたが、織作さんは左側のほうで、「エイッとやっちゃえ」という、牧さんは右側のほうで、その対称が面白いと思いました。織作さんは、直感的な風景の美しさを撮られていますけれど、その美しい風景と人間との関係を捉えていたと思います。美しい風景が際立っている。牧さんのほうは、人間の顔が中心でした。その顔がみんな良くて、まわりの山は背景というか、あんまり写さなかった。人間中心という印象を持ちました。お二人とも、それがいいバランスで逆転しているというような印象を持ちました。

原島　お二人から、それに対して何かございますか？

牧　過疎地で、人間がいなくなってくるのが寂しいので、多少やんちゃでも元気に生きていく人を増やしていきたいという、地域の人たちの思いが僕に乗り移って、僕もそういう思いで仕事をしています。たぶんそれが、内藤さんがおっしゃったように、「今、こんな人たちがいるんだよ」というふうに、ここにいる方々に伝えたい気持ちになっていたのではないかなと。

西粟倉村の風景とか街並みは、いっさい出さなかったんです。出すと、けっこうがっかりするんですよね。出したほうがよかったかもしれないとも思ったんですが。50年かけて、本当にダメな街並みを作ってきたから、50年かけてやり直そうという。どうやれば、織作さんの写真のような美しい風景が取り戻せるのか。今やっていることの延長線上にそれがあるのだろうか。そんなことも思いながら、聞かせていただきました。

原島　織作さんの写真の中で、人が出てきて、その人がいい顔をしていると、自然の中で生かされているのだなという感じがします。たんに自然があって人は無関係だというのではなくて、自然の中に人がいるということが一番重要なのかなという気が、私はしました。

織作　はい。「生かされている」と、いつも思うのですね。自然によって、いろいろなものを得ている。みんなそうだと思うのです。それと、その美しい自然を守るための規制というのが、じつはきちんとされているということなのですね。たとえば、ストラマトライトのエリアは、むやみに人を入れないために、立ち入り禁止にしています。シェルビーチは、観光客のためのエリアと立ち入り禁止のエリアを作ってあります。そういうふうに、守らなければいけない部分を理解したうえで、街づくりをしている。その中で、人が

自然からいろいろな知恵を受けて、生活をしているというふうに感じます。

世界遺産に選ばれたヨーロッパ最大のアレッチ氷河の話ですけれども。世界自然遺産というのは、本来は変わりゆくものには与えられなかったのです。地球温暖化のために氷河が溶けてきて、白いはずの氷河がグレーになってきているんです。そのグレーに変化してきている氷河に対して与えられた、初めての世界自然遺産なのです。ですから、これはもう、「これ以上、地球を傷めちゃいけないよ」という警鐘だったのです。そういう意味でも、ただきれいきれいで、「いいね」ではなくて、その裏に、やっぱり努力があるということ。規制があるということを、しっかり理解したうえで、人は自然から学びながら、生きていかなければいけないなと。いつも、きれいなスイスの風景を見ながら、感じています。

原島　おそらく僕が写真を撮ったら、ああいう写真は撮れないと思うのですよ。たぶん自然もたしかに美しいんだけれども、その中に、それを見る織作さんの目というか、そういう気持ちというか。今おっしゃったような気持ちが写真になっているのかなというふうに、僕は思います。それは、非常に大切なことだと思います。

一方で、内藤さんの最初のお話は、自然というものに対して、どう考えるかということでした。自然はたしかに美しいものだし、それに我々は生かされているんだけれども。自然は、我々にとって必ずしもやさしいものではないわけですよね。厳しさを持っている。その厳しさがあるからこそ、人は自然と闘ってきたのかもしれないのです。この前の大震災は、自然と共生するということは、たんに美しさだけではなく、やさしさだけではなく、厳しさも一緒にあるのかなあと。その中で、どうあったらいいかという問題提起を内藤さんはされている気もするのですが。

内藤　私は、こういう時代の大きい変換点にあって、面白い時代を生きているという実感があります。暗くなるというよりは、どう変えていったらいいかという発想が求められているわけで、これはなかなかエキサイティングな時代を生きているな、という印象を持っています。

先ほどの牧さんのお話の山林ですね。日本中に、ほとんど自然林は残っていません。戦後の植林事業によって、ともかく杉林ばかりです。山に関しては、これまでやってきちゃったことをどうするのか、という苦しさがある。僕もじつは、山のことについてはかなり踏み込んで関わってきているので、言われることは理解できます。これはもう、どうにもならないところまできているので、牧さんのように、やみくもに元気を出すことも、一つの生き方かなと思いました。

ルネサンス以降の近代という思考の誕生によって、自然と人間の関係が逆転したのです。本来は、自然によって生かされる関係から、自然を生きる道具として扱うというように逆転したのです。西欧的な世界観ですね。それに対して、季節はめぐってくるという、循環型の時間があります。これは東洋的、近代的な発想とは違うものですね。今、ひょっとしたら、それが求められていると、考えることもできます。そうすると、「自然は、生きるための道具にする」というのとは違う考え方になります。循環の流れに乗せて人間が生きていくというような、そういうビジョンがこれから生まれてくるのではないかと思います。

被災地の野田村の小田村長と、3時間か4時間、村をどうしていくかなと話した末に、村長が天井を見上げて、「でも内藤さん。いろいろ言うけど、俺たちはこうやって生きてきたんだよ」と、つぶやいたのです。「こうやって」というのは、100年とかではなくて、1000年ぐらいのことです。海の恵みをいただいて、時には海からひどい目に遭う。自然の恵みをいただきつつ、自然を恐れつつ生きてきた。そういう「こうやって」なんですね。たぶん、僕らは、もう一回、そういう人生観を思い出してみる必要があるのではないかというふうに思っています。

原島　なんとなく今日の話は、ここ数十年がまずかったみたいな話になりがちなのですが、僕は必ずしもそうではなくて、みながんばってきたんですよ。戦後、ホントにがんばってきた。それは、その時代においては必要なことだったと思うんですよね。だからこそ、今があるわけで。

そして、がんばってきた人たち。丹下さんとか、黒川さんという名前が代表的な旗手として出てきたけれど。あの世代は、万博のときにまだ若かったのですよね。若い人たちが、もう社会の中心になっていたわけですよね。

なぜ中心になっていたかというと、上の世代がみんな戦争で死んでしまったからです。若い人たちが、頑張らざるを得なかった。その人たちが、今という時代をつくってきた。今は、ある意味では、次の時代が始まる面白い時期になる。そういうことですよね。そういう意味では、暗い話ではなしに、ワクワクする時代です。ただ残念ながら、上の世代が死んでいないですからね。若い人たちが、なんとなく閉塞感ばかりになってしまう。それをどう乗り越えるかが、一番重要なことかなというふうにも思っています。

内藤さんへの質問が多いのですが、僕の名前が入っているものが一つありました。「私は、嫁として、30年以上、厳しい姑に仕えてきました。一昨年、長男と結婚した嫁には、同じことはしたくありません。昔の女性は、どうしてつながりを楽しくできなかったので

しょうか」。

それぞれの世代は、環境というか、状況の中で、一生懸命生きてきたのだと思います。それが、厳しい姑という形になったのかもしれません。でも、質問された方は、今という時代に生きていらっしゃるわけです。今という時代から見ると、嫁に同じことはしたくないということになるわけで。それぞれの時代を背景につながりも背負っていると、僕は思います。

かつてのつながりは、場合によっては束縛でした。家というものは、束縛。そこから抜けることが、自由を得る、自分の生き方や新しい生き方を得るという、そういうことだったと思うのですね。ところが今、むしろそれぞれが別々になってしまって、孤独になっているということが、逆に束縛にもなっているところがあります。一度解放されたあとに、もう一度つながりを求める時期になっているのだなと思っています。時代は今、また新しくなっているのではないかと、これを答にしたいと思います。

次に、内藤さんへの質問として。「震災以来、3.11 以来、私の価値観は変わってしまいました。今、浮いたままです」「近代という時代に対する文明観の転換が必要なのではないだろうか。それに対して、どういった言葉や物語を紡ぎ出してこれから行ったほうがいいのか」。一つずつに答えられないので、まとめて何か。お答えというか、あるいはさらなる問題提起になってしまうかもしれませんが、いかがでしょうか。

内藤　震災で起きたことは、本当につらい話が多かったんですが、そればっかりを、つらさばかりを見るのではなくて、事の本質をよく見ることが大切です。そうすると、あそこには僕らが今まで見ようとしても見えなかったものが全部見えてくる。僕は、建築とか、都市計画とか、土木とか、そういうテリトリーですけれど、ほとんどすべてが見えるという感じなのですね。牧さんが見れば、経済の側からも仕組みの側からも、あそこにすべてが見えるはずですし、織作さんの視点から見れば、風景の変容という意味で、50 年間やってきたもののすべてが、あそこに見えてくるような気がします。

よく見て、感じて、考える。復興支援だとか、いろいろありますけど、それはそれとして、片一方では冷静によく考えて、何が起きているかを見るということが、非常に大きな転換点をもたらすのではないかと思います。

1755 年にリスボン大地震がありました。リスボン大地震で、建物倒壊と火事と津波で、27 万人ぐらいの市民のうち 6 万人ぐらい亡くなった。このことについて、啓蒙思想家のヴォルテールが、「カンディード」を書くわけですね。そして、ルソーが「社会契約論」を書くわけですね。カントもリスボン大地震のことについて書くわけですね。極端な言い方をすると、フランス革命の思想的なきっかけは、1755 年のリスボン大地震だったわけです。

我々は、2 年半の間、毎日のように、テレビの映像で、津々浦々、子どもまで、みんながあの映像を繰り返し見続けています。そうすると、我々の頭の中に、何かがセットされたはずなんです。それがどういう形で表に出てくるかということだけがわかっていない。出口を探している。われわれの頭の中に何かがセットされているんです。これをどう組み立てていくかは、これからです。そこに僕は、次の時代の「美しく生きる」ということの答があるような気がするのです。

原島　ありがとうございました。それに関して、牧さん、織作さん、何かございますか。

牧　僕も震災のあと、現場にも行かせていただく機会がありました。当たり前に思っていたことが、当たり前じゃないというか。いろんなことをゼロベースで考え直さないといけない。いろんな問題がそこに凝縮しているという、あの感覚を大切にしながら、考え続けなければいけないと、思うようになりました。

織作　私も、瓦礫の撤去に行きました。ところが女性がなかなか呼ばれないんです。朝、まず保険に入るなどの手続きを終え、9 時までに椅子に並び番を待つのですが、呼ばれるのは男性ばかりなんです。女性の出番が全然なかったところに、家の中の家具拭きというのが、やっとめぐってきまして。

現場に行って、「実際にここまで泥がかかって」と、その家のお母さんがお話してくださいました。一生懸命、冷静を装おうとされていたのですが、あまりにも、計り知れない、ショッキングな心の痛みというのがわかりました。私が一拭き一拭きして、どれぐらいの効果があるのか。心の傷を縫うことはできないかもしれないけれど、お手伝いすることによって、お話することによって、少しは変わっていってくださればと思って、お手伝いさせていただきました。あれは本当に、ご当人じゃないとわからない部分はあると思います。

たまたま、私が審査をしているコンテストで、最上位になった方が、津波で命を落とされたのです。その方のお子さんの担任の先生から私に手紙が来ました。「あのコンテストで選ばれた方のお嬢さんの担任です」と。「お父さんのご葬儀があって、奥様のご挨拶がとても立派でした。その中で写真が好きでコンテストに選ばれたことを非常に誇りに思っていました」と。そのお話を先生のお手紙で知ったときに、残されたお嬢さんが、どのようにこのあと成長されていくのかなということが、すごく気になり、お手紙を書きました。半年ぐらいしてからでしょうか。「お父さんにならって写真を撮ろうと思って、カメラを持って、いろいろ動いています」と。

そういう、一つ一つの心のケアみたいなものからやっていかなければいけない部分もあると思いますし、もちろん、建築の観点からとか、いろいろな分野の人たちが、街を変えていかなくてはいけないということで、必死に努力されていらっしゃる。だから、双方で。心のケア、人のケア、そして、文化遺産、建築、いろいろなことが総合で行われないと、難しいと思いました。

原島　ありがとうございました。時間がそろそろ来ようとしております。お聞きしたいことがまだあるのですが。大体こういうパネルは、満足して終わるよりも、いろいろ自分自身に問題を抱えながら、終わるというほうがいいかと思いまして。結論を出さずに、締めたいと思っております。

最後に、最初の「それぞれにとっての自然・人・文化のつながりの中で生きるとは、どういうことでしょうか」という一番難しい質問ですが、短く答えていただいて終わりたいと思います。内藤さんから。

内藤　ここ数年、公私も含めて否応なく、生きることとか、死ぬこととかということを、考えざるを得ない局面にずっと立たされてきました。冒頭の原島さんの講義で、「人間は生存するための武器として、共同性とか文化を生み出してきたのではないか。その１％がチンパンジーとの違いだ」と言われていました。ただ、私はその共同性というのを、近代という文明は閉じていくという傾向を本質的に持っているのではないかという印象を持っています。

たとえば、私が死ぬときには、私が生きることと死ぬことは、私という個人の中に閉じ込められているわけです。私は死んだらおしまいだと思っているわけです。皆さんもそう思っているかもしれない。だけど、私は最近、それはちょっと違うんじゃないかと思うようになりました。これ、本音です。生きるということは、もっと広がりがある。今日は私が言葉を介して、皆さんとコミュニケーションをしていますが、私が生きている一部分が、皆さんの頭の中に広がっているというふうに考えたい。そのように、生きるということは、個人の中に閉じ込められているんじゃなくて、もっと広がりを持っているんじゃないかと思います。私がここで死んだとしても、皆さんの中に何かが残っていく。それが、生きるということの意味のような気がしています。

これは、建築でもそうなんですね。これまでは、素晴らしい作品を作り上げたとしても、それはある種、個人のなかに閉じられた自己満足だったわけです。しかし、そうではなくて、建築というのは、もっと街に対して広がりを持っている。都市というものも、まわりに対して広がりを持っている。「単体で閉じ込められた価値から広がりを持った価値へ」というのが、これからのあり方だと思います。大災害を経て、生命というものの意味、生きることの意味、個人の在り方、建築や都市の在り方、それらを広がりの中で捉え直すような社会に変わっていくのではないかというふうに思っています。

原島　ありがとうございました。牧さん。

牧　何かを背負うということが、とても大事ではないかなと思っています。うちの村にいる大島くんという木工職人は、村の出身でもなんでもないんですが、山主さんの話、木を育ててきた方々の話を聞くほどに、「なんとか未来に、この人たちの木を価値のある商品に変えて、その人たちの思いも含めてお客さんに届けていきたい」と。そのために、弟子も雇って、彼が死んでも、木組みの家具の技術をしっかりと残していきたいと、背負い込んで、もがいている。その姿は、「自然・人・文化のつながり」の中で、とても美しく、覚悟を決めて生きているように映ります。しわくちゃのおばあちゃんたちも、家の中での責任を背負い切って、かわいくて美しいんですよね。何かを背負ってやりきるということが、とても大事なのかなという気がしています。

原島　ありがとうございました。織作さん、いかがでしょうか。

織作　身近な話で言いますと、「ゴミを残さない」、「始末をする」というか。自分が出したものは自分で片付ける。小さいことですが「この街を守ろう」という意識がスイスの国にはあるのでしょうね。日本にも、きれいな町があります。たとえば郡上八幡がそうです。ゴミがない。見ていると、町の人が見つけて拾っているのです。それは本来、自分がやらなければいけないことだと思うのです。

ゴミじゃなくてもいいんです。いろいろなことを自分で始末ができるような人間が増えることが、必要ではないかなと思います。あとは、尊敬ですよね。自然にも。尊敬と後始

末。このへんが、すごく大事になってくるのではないかなと思います。

原島　ありがとうございました。最後に私ですが。この年になって、つくづく思うことが、「自然・人・文化のつながり」に、感謝する。この感謝する気持ちが、すべてにおいて必要になってくるのかなと、個人的には思っております。ということで、これでパネルを閉じたいと思います。どうも皆さま、ありがとうございました。

登壇者の講演資料の一部を都合により
未掲載にしておりますことをご了承ください。

公開シンポジウム
「美しい生き方を考える」シリーズ第 2 回

発　行　公益財団法人　花王芸術・科学財団
〒103-8210　東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10（花王ビル内）
TEL（03）3660-7055　FAX（03）3660-7994
編　集　公益財団法人　花王芸術・科学財団　事務局
印　刷　トキオ印刷株式会社
発行日　2014 年 3 月 31 日